

『社会教育』一九六六年十月（全日本社会教育連合会）

学習内容構成の観点

—生涯教育への序論—

矢口 新

わが国では教育といえ、まず学校教育を思い出す。社会教育などというのは、ほんのつけたしであるかのように考えられている。学校教育もしかしあまり本物の教育にはなっていない。学歴主義などという言葉があるように、学校教育の内容に関心があるのでなく、学校という形式の中で生活したという経歴だけが問題になっているのである。一般の人々の考え中には、人間の一生の間に、どういう勉強をして行くかというような反省はあまりない。ただ世の中のしきたりに従って、学校を出て、あとは社会で働く位しか考えていない。社会へ出てから勉強をするなどということはあまり問題になっていない。こういう雰囲気では社会教育といわれるものが本当に血の通ったものにならないのは当然であるとも言えよう。

こういう一般的な傾向についても近頃はぼつぼつ反省されている。学歴主義が反省され新しく能力主義などということが言われるようになった。特に産業界では、その方向へ急転換しつつある。それと同時に、産業界では教育ということもまた大きく関心がもたれはじめている。多くの企業、といっても大きい企業が先端をきっているが、様々

な方法を講じて教育訓練を実施している。最近では産業界の技術革新が急テンポで進んでいるから、その点からも教育の必要性は特に感じられている。これは、学校を卒業して社会に出ても、たえず勉強をして行かなくてはならぬことを示している。それでなくては企業が生存してゆくことができなくなって来たのである。

このことは、何も企業だけの問題でない。企業というのも一つの社会集団と考えたらよい。社会が生存して行くには、その成員の勉強、向上発展がなくてはならないことを示しているといったらよいであろう。現代社会は特に流動、進歩ということが特色となっている。それは何も技術革新といったようなことばかりでなく、生活全体の流動、進歩である。そしてそれは、社会の成員全体が常に勉強して向上していることを前提としているのである。つまり、社会の革新は成員の革新を前提とする。

しかし社会の進歩というのは、その成員の側からみれば、環境の変化というように考えることができる。成員は新しい環境に適応し新しい活動の仕方、生活の仕方を獲得してゆくのである。その点からみれば成員の進歩向上は、社会の発展によって刺激され、成しとげられるのである。結局社会の発展と成員の進歩向上とは循環しているのである。社会はたえず革新を上げて行かなければならない。成員もたえず向上しなければならぬ。それは相互に原因となり結果となって展開して行くのである。そこに生活の革新がある。それは社会の自己革新といってもよいかも知れない。そこに社会が教育という機能をもつ所以があるといえよう。

特に社会教育というものが果す役割は、この社会の自己革新と深い関係があるといつてよい。学校での教育は、基礎教育といわれるように、社会がこれまでにづくりあげた基本的なものへの導入のための教

育である。人類社会はたえず真実を求めてそれを表現して行こうという努力をして来た。現代われわれのもっている生活の内容はそういうものの結果であるといつてよい。その基本的な方向への導入は学校の教育によってなされると考えてよい。

いわゆる社会生活をするようになった成人たちは、学校教育で身につけたものを土台として、社会の進歩発達営みに積極的に参加するのである。それは流動進歩する社会の中で、たえず自分を革新しつつ、社会の発展向上に参加して行くという営みをするのである。そこにたえざる自己革新への研修がなくてはならない。それは社会の真実の探求と実現の営みとして社会的協同の形で行なわれるのである。言いかえれば、社会とは人類の真実への探求と実現の場なのである。個人個人はその場で自己の生命を燃焼させて、生命の意義を発揮するのである。それが各個人の向上進歩であり、同時に社会の向上発展なのである。人類の歴史とは、そういう個人の向上進歩に裏づけられた社会の発展へのいとなみが生み出したものといえよう。社会教育とはそのような人間発展への営みの自覚的な形態に他ならない。

しかしわが国では社会教育はそのような本来の意味で自覚されていない。単に表面的な機能として知識の伝達、技術の伝習としか考えられていない。尤もそれは社会教育に限らない。学校教育においてもそうである。教育というものが、単に知識、技能の授受という浅薄な意味にしか考えられていない。それは実は教育観の墮落なのである。

二

われわれは教育ということを知識を与えることだと考え勝ちである。もちろんもっと正確に言えば知識ばかりでなく技能も与えるなどというけれども、そのような細かいことは別にして教育ということと、

知識を与えるということとは、そうちがったことではないと考えているといつてもよいであろう。しかし果して知識を与えるということは意味のあることであろうか。いな、それよりももう一つ前に一体知識を与えることができるのであろうか。

与えるという言葉は、金を与えるというような使い方の場合はよくわかる。私が他人に金を与えるといえ、私の手から他人の手に金が移動するのである。知識の場合はどうか。それは形のないものであるから、金のように右から左へ移動するものではない。また金のようにもつものでないけれども知識をもつなどという言い方も比較的多く使われる。こんなことを言うのは何も言い方を問題にしているのではない。私の問題にしたいことは、こういう言い方をしている中に、知らず知らずに人間とかその教育とかについて間違った考え方ももつようになりはしないかということである。知識は金を与えるように、それをもっている人がもたない人に与えることができるものではない。そういう風に人間からはなれて知識が移動するようなものと考えられてはならないのである。知識とは本当は人間の知的活動と考えるべきものである。真実を探究する人間の活動、そういう人間の行動である。知識をもつ人というのは、知的な行動ができる人のことである。もつといえ、科学的に物をながめることのできる人のことであろう。こう考えれば、知識を与えるというのは、知的な活動ができるように育てるといふことである。科学的に真実を探究する態度を育てるといふことである。

わが国の教育観には、学校教育でも社会教育でも右に述べたような科学的態度、真実を探究する態度の教育という考え方が極めて少ない。人間の行動から遊離した抽象的な知識というものを考えてそれを授受すると考える。そこに人間が忘れられ、生命を失った形骸のみが

尊重される。そこに教育がいくら行なわれても、知的に行動する人間が生れて来ない。合理的に考え、真実を探求するということのできる人間が生まれない。いな、そこにつくられる人間は、知識を悪用し、低劣な私利私欲を満たすことを心掛ける人間である。いわゆる知識をもつ人間が一向に合理的に思考せず、真実を探求せず、不合理な生活習慣の中に没落している。社会が悪くなるのはこのせいである。知識をもつものがふえればふえるほど知能犯がふえ、悪徳政治家が横行し、三百代言のさばるのである。非行少年ばかりでなく非行老年が多く輩出する。最近の社会情勢はこのことを示している。それは道德教育の不足などという問題でない。道德教育というのもまた道德的知識を与えるというように知識教育のわくを抜け出ることができないから、生命を失った教育となるのである。

道德とは、人間生活の真実を発見し、実現する営みの中にあるものであり、合理的に考え、合理的に行動することの中にあるのである。それは本質的にしつけないこととしての意味をもたなくてはならない。つまり社会の向上発展のためにいかに人間の真実になつた行為をするかということであり、そういうことを子供の頃から行動として、行為としてつみあげる所にあるのである。それは具体的な生活の場を通して一つ一つつみあげられるのである。このつみあげを忘れては道德の教育にはならない。単に観念的な知識として与えられる所に、その知識を冒瀆するものが出るのである。その意味では単なる道德的知識は不要である。むしろ行為の習慣としての態度こそ重要である。科学の知識が必要なのでなく、科学的な態度が必要なのであり、道德の知識が必要なのでなく、道德的態度を形成しなくてはならぬ。

三

さて、社会教育というのは、きわめてあいまいな概念である。俗に学校教育と社会教育というように二つに分けていうから、学校教育以外の教育をすべて社会教育というかと思うと必ずしもそうでない。たとえば企業内教育といわれるものは普通社会教育とはよばない。また農林省がその系統機関で行なっている教育も社会教育の中から除外されている。労働省系統の機関が行なっている教育も除外されている。このように考えてみると、社会教育という概念は行政上のなわばりから来る便宜的なものであるらしい。社会教育の学習内容を考えるというとき、この概念のわくにとらわれていたのでは問題の本質を見失うおそれがあるのである。

現在の社会教育の概念は戦後二十年間にやつて来た実践の中からつくられたもので、今やそれを考え直さなければならなくなっている。戦後にアメリカの教育支配の時代があつたときに発生した社会教育という概念は、それなりに時代的意味はもっていた。要するに、それは不特定対象としての一般社会人に対する民主主義教育の役割を果すものであつた。農村の青少年の農業生活者としての具体的な教育は社会教育とは別に農林省を通じて行なわれた。労働者に対する教育は労働省を通じて、或は職業訓練とか監督者訓練とかという形で行なわれた。まだその他に国民七人に一人という率を占める公務員に対してはそれぞれの系統で教育する機関がある。こういう風にさまざまな教育が、学校を卒業して実際社会で働いている人々に対して行なわれているのである。それらの教育全体を大きくながめてみると、国民は実にさまざまな形でさまざまな教育を受けているのである。この傾向は最近ますます強くなり、一口に言つて職場、職場の教育は次第に充実して来ている。それらのことを置いて、社会教育というものを眺めてみると、社会教育というものがいかにも根のないものに見えて来る。

ここ十年來社会教育は都市で發展せず、農村でしか行なわれないうことが言われて来たが、その農村が最近分解し出したので、社会教育は次第にその地盤を失っている。つまり不特定対象をとらえるということをやっていたのでは、どこにもとらえる人々が居なくなつたのである。つまり言いかえれば、社会教育は農村の概念であつたといつてもよい。勤労青少年教育といつても、實際はそれは農村の青少年の教育であつたが、それも最近では都市化したため、なくなつたといつてよい。今かろうじて把握できるのは婦人という階層である。婦人を階層とよぶのはおかしいが、今のところ家庭婦人はまだ職場に吸収されていらないから、一種の不特定対象としてとらえられるとも言えよう。或は一般教育（これも漠然とした概念であるが）の対象として考えられるといつてもよい。しかし婦人も職場へ進出することが多くなると、それもまた様相をかえて来るであろう。更に最近では老人というような対象の把握の仕方がされているが、これも相当な年輩の者が職場に残るようになると、ごく高齢の者だけが対象として残ることになるであろう。

つまり社会教育の対象を従来のような一般的なとらえ方でつかまへようとしていたのでは、教育を考えることができなくなつて来たのである。それぞれの働く場所と結びついてそこで教育を考える必要が起つて来たということである。と同時に、教育の内容も、職能的なものが考えられなくてはならない。職場の生活に結びついたものは教育としては特殊な教育だというのが、従来の社会教育にたえずつきまがつていたが、それは社会教育がまだ具体的でなく、生活に密着して考えられなかつた時代の産物だといつてよい。民主主義の教育というよなことが、概念的、抽象的に考えられている時代は、対象も漠然とおさえられて居ればよかつたが、今やもうそういう時代ではなくなつ

た。もつと具体的に、きめの細かい内容が考えられなければならない。たとえば、民主主義の教育ということ一般論でなく、それぞれの具体的生活の場で、職場で、これをいかに実現するかということについての教育がなされなくてはならないのである。もつと具体的な例をあげれば、職場で行なつてゐる監督者の訓練というものの中に、いかに部下を民主的に取扱うかというようなことが大きく問題となつてゐる。そういうものを通じて、本当に民主主義を学ぶわけである。

このように考えて来ると、われわれは、社会教育という古い概念にとらわれずに、一度、現代の人間は若いころ学校教育を終つて、社会に出て、どのような場所で、どのように生活するか、そこでどのような行動をとらなければならないのかを、はつきりとおさえてみる必要がある。そこに大きく見えて来るのは、それぞれの人間が、職場を中心として、働いてゐるということであろう。いわば職能人としてあるということであろう。そしてそれが前に述べたように流動と進歩の中にあるわけである。その流動と進歩にこたえられるような教育を社会が準備する必要があるのである。つまり社会の自己革新のために、社会自らがその成員に対して教育を準備するのである。

次に見えて来るのは、それらの社会人が、様々な段階の学校を終つて、様々な形で職場に位置づき、様々な段階をへて、それぞれの職場でより高い能力を必要とする立場におかれて行くことである。年功序列にかわつて能力の序列になるというのは、職場がそこに働く者に対して、それだけきびしい能力向上を要求するということである。それにこたえられない者は脱落しなければならない。一生涯が向上の生活であり、生涯を自己教育、自己啓発の生涯として考えねばならぬ理由がここにある。それがカリキュラムの地盤である。

（日本生産性本部プログラム教育研究所々長）